

詩を読む

引用文献を
書けるようになろう！

今日やること

- ①二つ目の論文をまとめる(10分)
 - ②引用文献の書き方を理解する(10分)
 - ③自分の使う引用文献をまとめる(10分)
 - ④実際にレポートを書き始める(15分)
- (1)詩の引用
 - (2)論文の引用

論文の引用文献の書き方

著者「論題名」『収録刊行物』（何
巻）, pp. 何ページ-何ページ,
発行年

手順①

CiNiiで自分が使う論文
を検索する

手順①

CiNiiで論文を検索する

例として「『永訣の朝』の位相」
を調べてみよう！

論文検索

著者検索

全文検索

「永訣の朝」の位相

すべて

本文あり

検索結果： 1件中 1-1 を表示

☐

すべて選択：

新しいウィンドウで開く ▼

実行

20件ずつ表示 ▼

出版

☐

「永訣の朝」の位相：宮沢賢治の挽歌をどう読むか

吉良 幸生

あいち国文 (9), 23-35, 2015-09

機関リポジトリ

DOI



「永訣の朝」の位相：宮沢賢治の挽歌をどう読むか



吉良 幸生

この論文にアクセスする



機関リポジトリ



DOI

この論文をさがす



NDL ONLINE



CiNii Books

収録刊行物



あいち国文

あいち国文 (9), 23-35, 2015-09

愛知県立大学日本文化学部国語国文学科内あいち国文の会

収録刊行物



あいち国文

あいち国文 (9), 23-35, 2015-09

愛知県立大学日本文化学部国語国文学科内あいち国文の会

論文の情報をまとめよう！（例）

著者：

論文名：

収録刊行物：

何巻：

何ページ-何ページ：

発行年：

論文の情報をまとめよう！

著者：吉良幸生

論文名：「『永訣の朝』の位相：宮沢賢治の挽歌をどう読むか」

収録刊行物：『あいち国文』

何巻：(9)

何ページ-何ページ：pp.23-35

発行年：2015年

**実際の書き方に
まとめよう！**

論文の情報をまとめよう！

吉良幸生「『永訣の朝』の位相：宮沢賢治の挽歌をどう読むか」『あいち国文』(9),pp.23-35,2015年

引用文献を書く際の手順

- ① CiNiiで論文を検索する
- ②必要なデータを集める
- ③一つのまとまりにする

論文の情報をまとめよう！（自分の論文）

著者：

論文名：

収録刊行物：

何巻：

何ページ-何ページ：

発行年：

高村光太郎「狂奔する牛」について

狂奔する牛

ああ、あなたがそんなにおびえるのは
今のあれを見たのですね。
まるで通り魔のやうに、
この深山のまきの林をどろかして、
この深い寂寥の境にあんな情願をまき起して、
今はもうどこへ往つてしまつた
あの狂奔する牛の群を。

今日はもう止ませう、
画きかけてゐたあの穂高の三角の屋根に
もうテル・ヴェルトの雲が出ました
槍の水を溶かして来る
あのセリヤンの梓川に
もう山山がかぶさりました。
谷の白楊が遠く風になびいてゐます。
今日はもう画くのを止めて
この人跡たえた神苑をけがさぬほどに
又好きな焚火をさせう。
天然がきれいに掃き清めたこの苔の上
あなたもしづかにやすみなさい。
あなたがそんなにおびえるのは
どつと逃げる牝牛の群を追ひかけて
ものおそろしくも思せき切つた、
血まみれの、若い、あの愛麗した牝牛をみたからでせう。
けれどこの神神しい山に見たあの露骨な獣性を
いつかはあなたもあはれと思ふ時が来るでせう。
もつと多くの事をこの身に知つて、
いつかは静かな愛にほほえみながら――

「高村光太郎における動物表象

――自己と他者との相克をめぐる――」

鳥居 万由美

光太郎の動物詩を自己と他者との問題系から見た時、およそ二種類に分けることが出来る。(1)動物を理想像としたもの(2)動物を被抑圧者としてみたもの(3)動物の他性と向き合うもの、である。尚、この三要素の幾つかを兼ね備えた詩もある。

(中略)

このように(1)と(2)のタイプでは、自己と、その他者である俗世間を神聖／俗に分割し、倫理的な正当性は前者にのみもたら付与されている。自己／他者の対立は、光太郎が理想とする「自然」の力を体現する動物と、卑俗な人間界という、動物／人間の対立構造と重ねられている。

しかし、光太郎には(3)動物の他性と向き合う詩もあった。そこでは二項対立に回収できない、複雑な自己と他者の葛藤を洞察する姿勢が見られ、自然概念、そしてそれを体現する物としての動物性は、むしろ自他の差異をそのままに、両者を融和的に包摂するものとして働いている。……

鳥居万由美、「高村光太郎における動物表象――自己と他者との相克をめぐる――」(『言語情報科学』第十四号、二〇一七・三四頁、二〇一六年)

【解説】(メンバー：吉田、中澤)

「狂奔する牛」は、『智恵子抄』において「樹下の二人」の直後に配置されている詩である。

鳥居の動物詩の分類に従うならば、この詩は(1)動物を理想像としたものとして考えられる。そして、鳥居によれば理想的な「自然」の力を体現する動物は、自己／他者の区分において自己に相当する。

鳥居の論を踏まえると、「狂奔する牛」における「牛」は、語り手である自己(＝高村)の隠喩であると考えられる。この詩を書いた頃、高村が貧窮しながらも芸術活動に打ち込んでいたことを考えるならば、「ものおそろしくも思せき切った」「血まみれ」の姿は、そうした高村の姿を表していると言える。さらにそうした「露骨な獣性」の牛は「神々しい山上」に在ると表現することで、牛＝高村に芸術活動に専念するものとしての聖性を付与している。

また、この詩にはあなた(＝智恵子)がその牛の姿におびえる描写があるが、詩の傍線部からは、そうした牛(＝高村)の姿を智恵子に受け入れてほしいと願う高村の思いを読むことが出来る。総じて、光太郎と智恵子の夫婦愛をより円熟にしたいという思いと、智恵子への愛情が読み取れる穏やかな詩である。

意見を踏まえた作品評価

論文を踏まえた自分の意見

論文の要約